

佐 渡

夏場の低温で不作 倉

大学生ら「バイオ米」収穫 小

市が筑波大学などと取り組むバイオエタノール生産システム研究の一環で、原料となる飼料イネ「夢あおば」の刈り取りがこのほど、小倉の棚田で行われた。天候不順のためイネのほぼ半分は葉

2007年度から実施。最終年度のことしは5月、小倉の2・3ヶ所を含め、飯持、真野、浜梅津の水田計38ヶで種まきが行われた。

「小倉千枚田」で知られる棚田でのイネ刈りに、市職員や筑波大の学生ら10人が臨んだ。あぜ際のイネを手で刈った後、機械で収穫した。携わった同大大学院の

や莖が青いまま、実入りが悪さが際立った。11月にかけて収穫米をエタノール化し、生産コストとエネルギーの経済バランスなどを分析する。

研究は、耕作放棄田の有効活用などを目的に、

藤枝隆さん(25)は「自分分はコメの」発酵試験を行う立場だが、コメ作りの現場との連携は不可欠だと感じた」と話した。

参加する研究機関によると、ことしは出穂から登熟までの気温が低く、標高約350㍎のこの棚田では大きな影響を受けた。空のむみが目立ち「昨年より(実入りが)悪い」と肩を落とす参加者もいた。

これまでに真野、飯持の水田で収穫が済んでいるが、いずれも冷夏の影響で期待した収量は得られていない。浜梅津では鳥に種が食べられるなどし、収穫に至らなかった。



「夢あおば」を収穫する市職員ら＝小倉バイオエタノール用の飼料イネ